

『ただ、ひと言』井上隆晶牧師

サムエル記上 15 章 18～23 節、マタイ福音書 8 章 5～13 節

①【神を軽んじるサウル】

イスラエルの王として選ばれたサウルは、その使命を果たさなかったために王位から退けられました。その原因となった二つの出来事が聖書に書かれています。一つはペリシテ人と戦った時に、預言者サムエルの到着が遅れたので、彼はサムエルに代わって焼き尽くす献げ物を献げました。「あなたは何をしたのか。」とサムエルに問われた時、彼は「兵士が私から離れて行くのが目に見えているのに、あなたは約束の日に来てくださらない。…ペリシテ軍が私に向かって攻め下ろうとしている。それなのに、私はまだ主に嘆願していないと思ったので、私はあえて焼き尽くす献げ物を献げました。」（サムエル上 13 : 12）と答えました。するとサムエルは「あなたは愚かなことをした」と彼を責めました。戦う前に、神に祈ろうとして献げ物をしたサウルの一体どこが愚かなのでしょうか。

二つ目は、主は「アマレクを討ち、アマレクに属するものは一切、滅ぼし尽くせ。」（サムエル上 15 : 3）と命じられたのに、サウルは「羊と牛の最上のもの、初子ではない肥えた動物、小羊、その他何でも上等なものは惜しんで滅ぼし尽くさず、つまらない、値打ちのないものだけを滅ぼし尽くした」（9 節）ことです。サムエルがサウルの所へ行くと、彼は「私は主のご命令を果たしました。」（13 節）と得意げに言います。しかしサムエルは「それなら、私の耳に入るこの羊の声、私の聞くこの牛の声は何なのか」と問うと、サウルは「あなたの神、主への供え物にしようと、羊と牛の最上のものを取って置いたのです。ほかのものは滅ぼし尽くしました。」（15 節）と言います。その方が賢いやり方の様に思えます。しかしサムエルはこう言います。「主が喜ばれるのは、焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。見よ、聞き従うことはいけにえにまさり、耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。反逆は占いの罪に、高慢は偶像崇拜に等しい。主の御言葉を退けたあなたは、王位から退けられる。」（サムエル上 15 : 22～23）ここに彼の問題は高慢と反逆だと書かれています。

①《高慢》とは、自分が召された「身分」に留まらなかったことです。サウルは王としては召されていましたが、祭司としては召されていませんでした。にもかかわらず彼は祭司の仕事もしてしまいました。自分の分を超える事は罪なのです。アダムは人間の分を越えて「神の様に善悪を知る者」になろうとしました。墮落した天使もそうです。「自分の領分を守らないで、その住まいを見捨ててしまった天使たちを、大いなる裁きの日のために、永遠の鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込められました。」（ユダ 6 節）と書かれています。働きには神が与えられた分担があ

り、領地も神が与えた領土を越えてはならず、この世で持つことができる物も神がくださった分を越えてはならないのです。渡辺和子シスターの本の中に、修道院の食堂では「自分の前に置かれた皿を取りなさい。」と命じられたと書かれています。自分の分際を知り、神から自分に与えられた分を守ることが大切です。

②《反逆》とは、神の言葉よりも、自分の言葉・自分の判断を重んじ、それを上に置いたことです。私たちは主人ではなく僕です。僕は主人を操作しようとしてはいけません。それは自分が主人になることなので偶像崇拜になるのです。最上の物を神様への供え物にすることは、立派な信仰的行為であるように見えますが、神はそんなものは必要とはしていません。これは自己満足の行為なのです。「私は～をした」という「私、私」という匂いがプンプンします。統一協会は「私は神の為にやっているのだ」と言って、人を騙して手に入れた大金を献金しました。「神様には最高のものを捧げたいのだ」といって、教会を振り回した信徒もいました。でも結局は神や教会を利用しているだけで、本当は自分のためにやっているのです。神が私たちに求めておられるのは、神の言葉に聞き従うことであり、後ろに退き僕になることです。イエス様は何でもお出来になるのに、神が許可しなければ何もなさらず、僕に徹せられました。立派な事を何かするのではなく、僕になれるかどうかの方が大事なのです。

②【百人隊長の信仰】

一人の百人隊長がイエス様の所に来て、中風で苦しみ寝込んでいる自分の僕を癒してほしいと願いました。イエス様は早速、家に行って癒してあげようと言うと、彼は「主よ、私はあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、私の僕はいやされます。」と言いました。彼は自分の経験から、部下の兵士に「行け、来い、これをしろ」と言えば、すべてそのとおりにするのですから、まして権威あるキリストに、すべてのもの（病気も）が従わないはずがありません、と言ったのです。イエス様は彼の言葉を聞いて感心され、「イスラエルの中でさえ、私はこれほどの信仰を見たことがない」（マタイ 8：10）と言って彼の信仰を褒められました。そして「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように」と言われると、ちょうどその時に僕の病気は癒されました。

百人隊長は、イエス様を絶対的な権威ある方だと信じました。その方の言葉なのだから、必ず成ると信じたのです。ユダヤ人たちのイエス様に対する態度とは正反対です。バーゲンセールに行行って少しでも良いものを掴もうとして押し合う人のように人々はイエス様を扱いました。ある箇所には「群衆に押しつぶされないために小舟で沖にこぎ出した」とも書かれています。イエス様を押しつぶしてでも病気を癒してもらいたかったのです。人々はイエス様を自分の願いを聞いてくれる便利屋として利用しました。そして自分の願いを聞いてくれないと分かったと、

手の平を返したように、十字架につけて殺しました。外国人であった彼には、ユダヤ人の信仰が偽善であることが見えたのです。それにも関わらず、一生懸命彼らと関わろうとするイエス様の誠実さ、彼ら一人一人に手を置き、大切に扱って下さるイエス様の姿が貴く見えたのです。この百人隊長は、**貴いものを貴いものとして見る**ことができた人だった、つまり**神を神と出来る人**だったのです。聖書では**神を神とすることが出来ない**というのが**罪の根**であり、**罪の本質**です。先ほどのサウルの問題点もそこにあると思います。彼は神を神とすることができなかつたのです。主の祈りの「御名が聖とされますように」の「聖」とは区別するという意味です。被造物と同列に置かないという事です。神の言葉を人間の言葉と同じように聞いてはなりません。神を神とするというのは難しいことなのです。

③【神に聞き従うことは最高の恵みである】

●ストレスがあっても心が疲れない人には特徴があります。アメリカの医療社会学者であるアーロン・アントノフスキーは「第二次世界大戦中にナチスのユダヤ人強制収容所に収容されながらも、その後も健康を保っていた女性たち」について研究をしました。過酷な経験をしたにもかかわらず健康を保っていた女性たちが共通して持っていた考え方や価値観を分析した結果、「**首尾一貫感覚**」を持っていたことが分かりました。首尾一貫感覚とは、物事の初めから終わりまで、同じ主義を貫き通すことを表しています。それは、

- ①自分の置かれている状況や将来の見通しが立っていること。
- ②「なんとかなる」と思えること。
- ③自分の人生や自分に起きることにはすべて意味があると思えること。

この三つは聖書の中に書かれている事です。③は「**万事が益となるように共に働く**」(ローマ 8:28)、②は「**神は、…耐えられないような試練に遭わせることをなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう逃れる道をも備えてくださる**」(I コリント 10:13)、①は将来キリストに似姿になることです。クリスチャンは聖書を読み、信仰することにより、知らない内にこの首尾一貫感覚を養ってもらっているのです。それにより、どんな過酷な環境のなかでも生き生きと人生を歩むことができるのです。

サウルから神が離れ去ると、悪霊がやってきて彼を支配するようになり、妄想が始まり、人を恐れ疑うようになり、家臣の声に耳を傾けず、罪のない人たちを殺し、どんどん悪くなってゆきます。神が共にいてくださるので、私たちは悪から守られているのが分かります。主の僕になることほど祝福されることはないのです。この百人隊長のように、**貴いものを貴いものとして見る**ことができるように、**神を神と出来る者**となれるように祈りたいと思います。